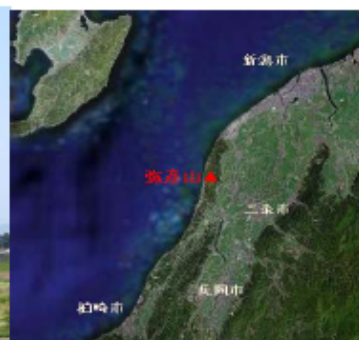


日本三彦山の一つ 越後 弥彦山 Walk 2007. 5. 16.

古代の鉄の国「越」 越後 弥彦山に鍛冶神の痕跡を探して

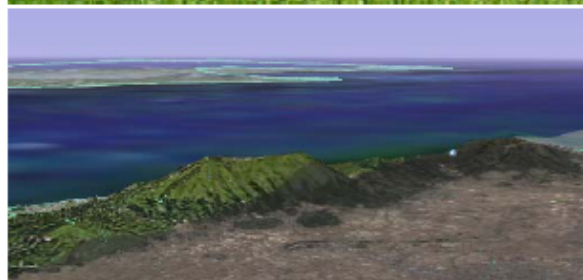


1. 日本三彦山の一つ 越後 弥彦山 Walk
2. 越後平野の不思議な地形 謎の越後平野 (資料)
3. 弥彦山と鍛冶神伝承 (資料)

日本三彦山の一つ 越後平野の稲穂の中にぽっかり浮かぶ信仰の山「弥彦山」

越後平野の稲穂の中にぽっかりと浮かぶ弥彦山 標高 638m と低いのですが、越後平野の海岸に立ち、越後平野や海のどこからでも見える山で古くから信仰を集めた山である。隣の峰続き多宝山・634mと双耳の峰を有する独立峰で、深田久弥著「日本百名山」は「山 高きをもって尊しとせず。だが、ある程度の高さが無くては、私の指す山のカテゴリーには入らない。例えば、越後の弥彦山や、京都の比叡山や、豊後の英彦山など、昔から聞こえた名山には違いないが、あまりに背が低すぎる」とあとがきで書いている。

また、九州の英彦山 播磨の雪彦山とあわせて「日本三彦山」と呼ばれ、これらの山の周辺では古代から金属を求めて「山師」が山中に分け入り、金属採掘・精錬 特に「銅」と関連が深い。弥彦山にも銅を採掘した跡(北側の多宝山山麓の間瀬銅山など)や数多くの鍛冶関連伝説が残され、弥彦山「弥彦の神」は鍛冶と関連した神(谷川健三著「鍛冶場の母」など)といわれる。



ゆっくりと一度は歩いてみたい山でしたが、やっと実現です。

5月15日 柏崎に出土した古代の製鉄コンビナート軽井川南製鉄遺跡群を見て、JR長岡駅前のビジネスホテルに泊まる。

長岡に泊まっておれば、簡単に行けると思っていましたが、大間違い。車でないと厳しく、昔から頭にあった「新潟県の交通網の不思議」を思い出しました。

北陸から苦勞して海岸線を通ってきた汽車は 広大な越後平野を目前に、柏崎で90度 内陸側に折れ曲がって、しかも内陸側の越後平野の縁の山裾を走る。

また、さほど遠くない海岸にも越後線が走り、おまけに、新潟市へは新津から盲腸線ではいる。北陸や東京から東北へ向かう北の特急は新津からそのまま北へ向かい、新潟には入らない。

東京-新潟を結ぶ上越新幹線も 後から出来た為でしょうが、越後平野の長岡にはい



ると、今までの鉄道網を無視するかのように まっすぐ新潟へ越後平野の中央を横切っていくのである。

燕・三条駅など電車に乗り換えようとすると大変です。

(なお、燕・三条は 自動車道網では北陸自動車道が通り、非常に便利がいい。

まさに古い鉄道網から 一新幹線・自動車道の体系に組替えられているのが新潟です。)

「何でこんな不思議が・・・」と思うのですが、昨今 衛星写真が発達して、空から見る地形図見ると実に面白い。越後平野をその衛星写真で見ると実に不思議な地形が次々と見えてくる。

弥彦山の山塊もなぜか 広大な平野の中、本当に狭い幅で日本海沿岸にへばりついて、山地が延びている。

また、信濃川が海岸への出口を求めて、越後平野をのた打ち回って流れるさまも面白い。

新潟の地形の成り立ちを知らないと本当に不思議なところ。

今回 私の知らなかった疑問を少し調べましたので、別項でお話します。



新潟の地形

南西から北東へ 平行に並ぶ丘陵・山地の間を
のたうって流れ下る信濃川・阿賀野川が一つになって越後平野を作っている

柏崎の北 越後・東頸城丘陵の不思議な地形 右端は信濃川

越後の地形は 海岸・平野・山地いずれも南西から北東に流れ、川を中心とした末広がりの平野でない。

衛星写真で見る信濃川も新潟市が河口 のた打ち回っていますが、河口の幅は小さく、広い川幅を持つ阿賀野川とは対照的。

柏崎の北の海岸にへばりつく越後・東頸城丘陵にみる魚の骨のような不思議な地形。この中を越後線が走る

衛星写真に見る越後の不思議な地形と交通網

弥彦山の上からそんな不思議な地形がどうみえるのか????

ちょうど 米どころ新潟は田植えの季節 水田に水が入り、広大な越後平野全体が海となって、きらきら太陽に輝く姿がみられるだろうか????

また、弥彦山と古代の「銅」の関係は日本三彦山の関係から解るのですが、古代鉄の国「越」で、その越後で本当に古代「鉄」の痕跡が見つかるのだろうか????

イメージをいっぱい膨らませての 日本三彦山のひとつ 弥彦山への walk

標高 638m の低い山でしたが、気持ちのよい新緑の山歩き。しかも さえぎるもののない360度の素晴らしい展望。古代越の国に思いをめぐらせながらの楽しい walk でした。

また、「越後は筒石 親不知 ひゆるり～ ひゆるり～ 風が吹くだけ(倍賞千恵子が歌う NHK 深夜便「冬のたび」)」のメロディーと中越大地震の被災の様子が頭をよぎっていましたが、それらが、大古から背負ってきた越後の自然との戦いの歴史であり、土地の人たちの語り、教えて抱いた明るい姿にも ほっとした旅でもありました。

1. 日本三彦山の一つ 越後 弥彦山 walk

5月16日朝 快晴 眠気まなこで5時39分発新潟行の普通電車に乗る。東三条で弥彦線に乗り換えて弥彦まで1時間。この電車を逃すと次は弥彦に着くのがずっと後になる。新幹線で燕・三条駅に出る方法もあるのですが、時間的には差がなく、やっぱり、弥彦線に乗らねばならない。長岡から斜めに越後平野を横切れば早いのですが、そんな便利なバスもなし。

朝が早いので、車内にはほとんど人影なし。車窓からは左手に上越から奥只見の山がうっすらかす、反対側の車窓からは田園風景の向うに弥彦山が双耳の峰を見せている。双耳の峰の左が弥彦山 右が多宝山 そして、一番左端のずっと低い山が国上山 いずれも古くからの弥彦信仰の山々 これらを総称して弥彦山と呼ばれることもある。この山塊の右 新潟市に近いところにもうひとつ春の花の山角田山が弥彦に重なって見えている。



日本三英彦山の一つなので、もっと荒々

しい男性的な山かと思っていましたが、関東平野に浮かんで見える筑波山と同じ感じである。東三条で乗り換え、市街地を抜け、信濃川をわたると、まっすぐ正面の弥彦山に近づいてゆく。

三条・燕の市街地を抜けるとまたのどかな田園地帯。ゆったりとした気分で っいつい眠りこけて、ふっと車窓を見ると大きな赤い鳥居が家並みの中に見え、赤く柱が塗られた駅舎が見え、寝ぼけて反射的に飛び降りる。

弥彦駅の一つ手前の無人の「矢作駅」でした。



弥彦線矢作

英彦山神社の赤い鳥居が見える

まだ、「朝は早いし、歩いて弥彦の街へ入るのもいい」と田園地帯の中、まっすぐ弥彦山へ向かう街道を歩きだす。山が低いこともあるのですが、弥彦の山は田園地帯からいきなり、弥彦山がそびえている。



弥彦の一つ手前 矢作の集落から弥彦への街道が まっすぐに田園地帯の中を伸びている

正面左手手の峰が弥彦山 その右にロープウェイの駅も見える

30分ほど歩いて、小さな坂を越えると弥彦の街。

弥彦山山麓の傾斜地縁に包まれた弥彦の街が広がっている。

「弥彦の神」を祭る弥彦神社の門前町であると共に、弥彦温泉の街。 弥彦山が古い火山であることを思い起こしてくれる。旅館や土産物屋などが並ぶ中心街の坂道がまっすぐ山へ向かって伸びている。

朝が早いのとシーズンオフでほとんど人影なし。もっとケバケバした街かと思っていましたが、落ち着いた静かな門前町。弥彦神社への街道筋をそれて、JR弥彦駅にゆく。雑誌やTVで何度も見た印象の強い赤い神社建築の駅舎。この赤に寝ぼけてしまったのである。街道筋に立ち並ぶ観光地の家並みを眺めながら、弥彦神社へ坂道を登る。



弥彦の街への入り口 2007.5.16.

弥彦山の頂上には弥彦神社の奥社があり、弥彦神社の奥から登山道がついている。また、ロープウェイも同じである。今日はできれば、糸魚川まで行きたいので、登山道を登って 帰りはロープウェイのWALK計画

ふと道際の料理屋の軒先を見ると腹を開いた「鮭」が何本も軒先にぶら下がっている。岸田劉生の「鮭」の絵はもっと北の村上市であるが、まったく同じ光景である。そういえば、昨日夜 入った郷土料理の店でも 鮭そしていくらが出て来て、「なんでやねん」と思っていました。越後の川には鮭が遡上し、確か信濃川の上流 長野県の千曲川に鮭を呼び戻す。

運動をしている市民グループの話を read 記憶がある。関西では見られぬ景色でした。

■ 早朝静かな街を弥彦神社へ

まだ、人気の少ない街中を弥彦野山にまっすぐ近づいてゆき、弥彦神社への案内 板にしたがって、右へ折れると正面に赤い鳥居が見えてくると弥彦神社の入り口の正面 位置の鳥居前。鳥居に「弥彦神社」の金文字の額が上がり、背後には 緑の森が広がって、そのコントラストが美しい。



JR弥彦駅



弥彦神社への広い道路



料理屋の軒先につるされた鮭



弥彦神社 一の鳥居前の家並み

弥彦神社の赤い鳥居をくぐると 緑に包まれた静寂の世界。

石畳の参道の向うに社殿に向かう。まっすぐに立ち並ぶ杉林の中 右に折れて石の二の鳥居をくぐると綺麗な随神門がみえ、弥彦山を背に門の奥に拝殿の姿が見える。随神門をくぐると正面に堂々とした拝殿が見え、その後ろ左手に奥宮のある弥彦山の頂上がみえる。弥彦山は双耳峰であり、この山全体が信仰の対象だったのだろう。拝殿・社殿はこの双耳峰の山を正面から拝むようになっている。

この弥彦神社の創建年代は詳でないが、社記によると和銅4年（711年）、詔により神域を拡げ社殿を造営し、延喜式に名神大社と記されている。祭神は金属精錬と関係の深い天香山命で、越後国開拓の詔を受け、越後国の野積の浜（現長岡市）に上陸し、地元民に漁労や製塩、稲作、養蚕などの産業を教えたといわれ、越後の国を造った神として弥彦山に祀られ、「伊夜比古神（弥彦神）」と呼ばれて崇敬を受けている。





本殿に向かう杉林の中の参道



舞殿



随神門



弥彦神社 拝殿と背後 弥彦神社の神域弥彦山 2007. 5. 16.

左弥彦山頂上に奥宮がある 弥彦山は双耳峰であり、この山全体が信仰の対象だったのだろう。

拝殿・社殿はこの双耳峰の山を正面から拝むようになっている。



「弥彦の神」伝承 (整理)

弥彦の神は遠く海より、弥彦の海岸 野積の浜に上陸して
漁労や製塩、稲作、養蚕などの産業を教えたといわれ、
越後の国を造った神として弥彦山に祀られ、
「伊夜止古神」と呼ばれて崇敬を受けている。
また、「弥彦の神」は片目との伝承が周辺に広くあり、
弥彦山から 銅などの鉱物資源が出ることから、
弥彦の神は 海を渡ってきた鍛冶集団の神(鍛冶神)とも考えられている。
また、大江山 酒吞童子の生まれが弥彦といわれ、
弥彦伝説、弥彦三郎(鍛冶場の母)伝承など多くの鍛冶伝承がある

「弥彦神」を祭る弥彦神社の祭神は天香山命で
父皇統鎌・鍛冶と関係深い古代の物部氏・尾張氏の始祖祖につながる。
後年 銅など金属統鎌と関係深いことから祭神とされたといわれる。

参考 谷川健二「鍛冶場の母」ほかより
藤田治雄 雑誌『高山』に寄稿報告より
(Kiichi Saitoさんの「いづか」月報の巻末【弥彦神社より】)

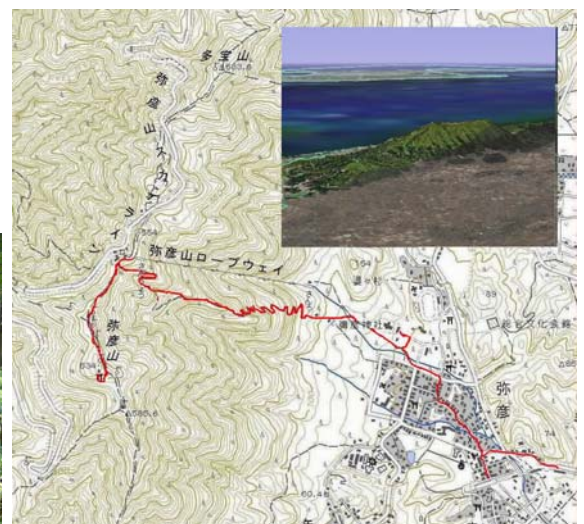
弥彦神社の由来と弥彦神伝

■ 弥彦山の頂上へ

弥彦神社の拝殿のすぐ横から神社を抜けて左手の林の中に入ったところから、弥彦山山頂まで約1時間 良く整備された登山道が続いている。

奥社のある山頂への参道でもあり、石の鳥居と赤い神橋がかかっている、山頂に向かって登山道が続く。すぐ右手北側の谷筋にロープウェイがかかっている。

地図で見るとまっすぐ尾根筋をつづら俺の道が続いてロープウェイの駅の横の稜線に出る高度差約500mの登りである。





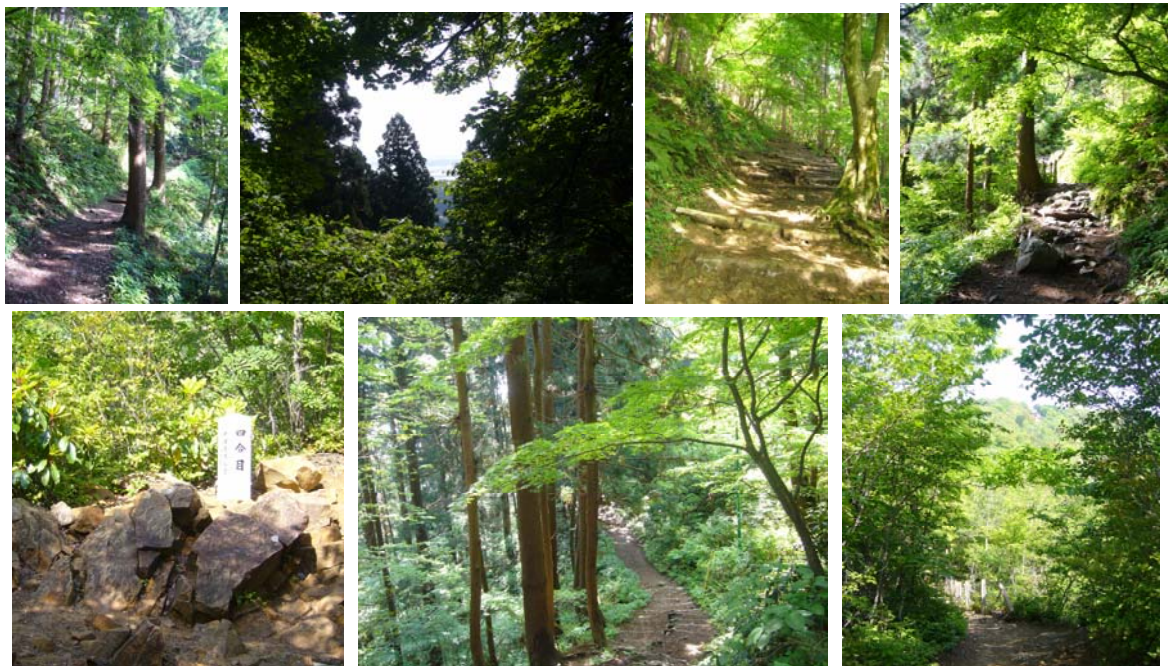
弥彦山への登山口周辺 頂上に弥彦神社の奥社への参道で9合目まで標識が整備されている

入り口からすぐに林の中の急な登りが続くが、先がわかっているのも、気楽なものである。

ジグザクの上り坂が続くが、淡い新緑の緑が心地よい。

時折、木々の間から、ちらちらと眼下に広がる越後平野の水田が輝いている。

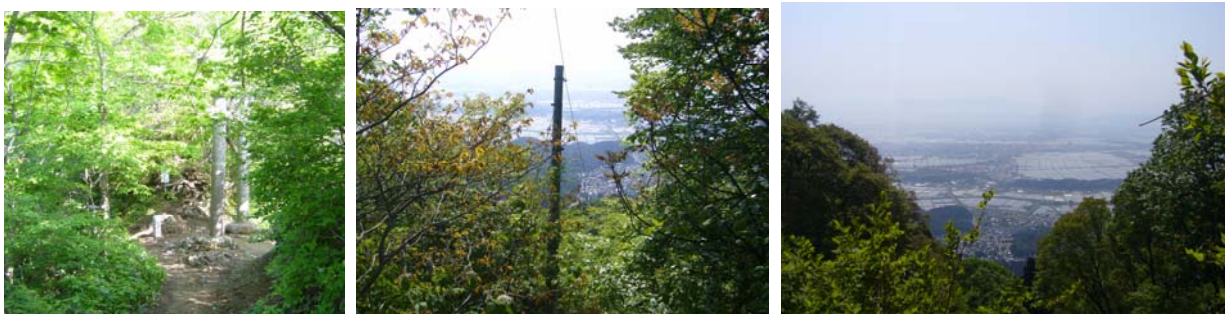
登りだして 30分ほどで4合目を過ぎ、五合目に差し掛かると、頂上部の稜線にあるロープウェイの駅の辺りが見え、ロープウェイのかかっている谷のすぐ横の尾根を登って、やっと半分か。



弥彦山 登山道の緑 2007.5.16.

林の中の斜面を抜け、尾根筋に出たところに石の鳥居があり、道は尾根を越えて、反対側に巻き道になって、少し下っている。ここが五合目。見ると尾根筋にロープが張られ、尾根通しを待つすぐ上って行くルートもある。参道はどうも随分下ってから巻き道になっているようなので、ちょっと 昔の荒々しい山道も味わいたいとそのまま、直登の尾根通しに行く。

ロープを便りの岩を乗り越え、乗り越えのルートでしたが、眼下に越後平野を眺められ、20分ほどで左手からの巻き道と合流して、程なく9合目の標識のある稜線に出た。



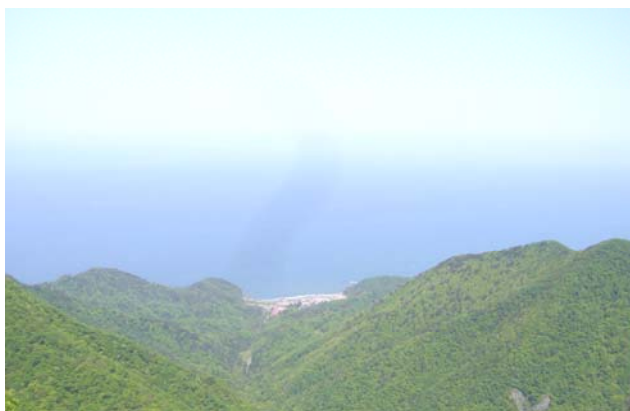
五合目の上周辺から見る越後平野 2007.5.15.



丁度双耳の峰の間で、左へ行くと弥彦山 右側は ロープウェイの山頂駅から多宝山へと続く稜線の道。 ここで、初めて日本海側が見える。ロープウェイ駅までもどるが、海を隔てて 西側に浮く佐渡は残念ながら、うっすらと島影が見えるのみで、よく見えませんでした。



稜線へ登りきった9合目



弥彦山 稜線から見た日本海側 海の向うにうっすら佐渡
海岸沿いの砂浜は 田ノ浦・間瀬へと続く海岸
この周辺山腹からは銅が出たところ



南側の峰 弥彦山



日本海 佐渡遠望



北側の峰 多宝山

ロープウェイ山頂駅のある山頂公園で

弥彦山がここでそのまま西の海に没しているのが見える。南側にはアンテナの乱立する弥彦山 そして、北側にはきれいな円錐状の多宝山が見え、日本海側の山腹を縫って登ってきたドライブウェイも見える。

見下ろす海岸沿いは 銅など鉱物資源が採掘・精錬に携わった精錬鍛冶集団が海を渡ってきたところで、この弥彦山が「弥彦の神」と崇敬される数々の伝承を持つところ。古代数多くの山師たちがこの山中を渡り歩いたろう。



山上公園から弥彦山頂上へ
弥彦山の頂上部には アンテナが乱立
ここが越後の中心であることを示す

山頂公園から、南へ引き返して 弥彦山山頂へ向かう。アンテナが乱立する弥彦山の頂上部 二つほどコブを乗り越え、ぱっと視界が開けたところが、南の端 弥彦山の頂上で、弥彦神社の奥社が祭られている。

そばに社務所がある鳥居をくぐり 石段をあがるとそこが狭い峰の頂で、右手に弥彦神社の奥社が祭られ、左手の狭い広場からは、越後平野から日本海が展望できる。

まっ青な空に青い海と緑の山 そして キラキラと太陽にきらめく越後平野のモザイク模様
素晴らしい景色が広がっていました。

弥彦の街から頂上まで約 1 時間の walk。 眼下には今登ってきた弥彦の集落 そして 越後平野をのたうつ信濃川 季節によっては能登半島まで見えるという南には 柏崎米山をバックに出雲崎の狭い白砂の浜にへばりつく越後丘陵。そして、海には佐渡へ向かう高速船が白いラインを描いていました。

丘陵地の緑の帯を断ち切る信濃川の放水路が寺泊海岸へ抜け、弥彦から続く酒天童子の故郷 国上山。その海岸は「弥彦の神」が海を渡って 上陸したという野積の海岸。

これら越後平野の縁には 南海岸の柏崎米山から北へ 信州・上越の山々 越後三山から奥只見の山々 そして 飯豊の山々がぐるりと取り囲んで 遠く霞んでいる。

ずっと座っていても飽きない景色でした。

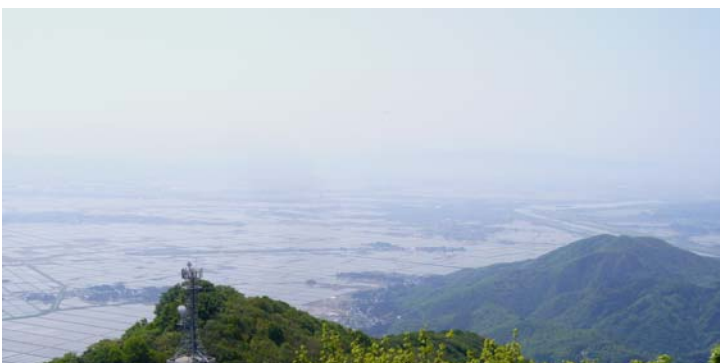


弥彦山頂上 弥彦神社 奥社

■ 越後平野展望

弥彦山からの展望(1)

南側海岸沿い 雨乞い山・国上山と続き、その奥に越後丘陵が海岸沿いを柏崎へと続く・右手 越後平野長岡周辺



越後平野 分水町周辺 信濃川が右中央で放水路を分岐



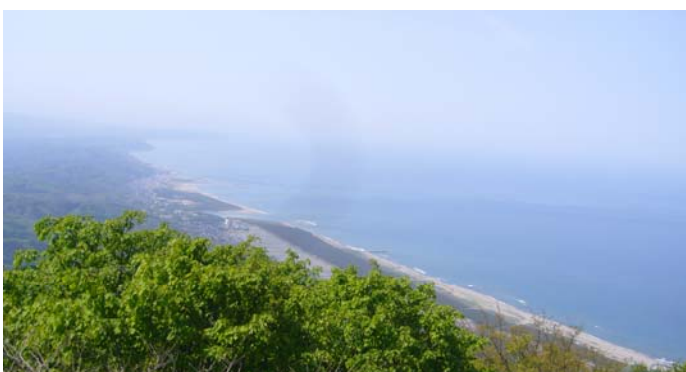
信濃川放水路河口 寺泊

弥彦山からの展望(2) 中央眼下 岩室・弥彦から燕三条方面



弥彦山の下に広がる越後平野の水田群 岩室周辺

弥彦山からの展望(3) 日本海



寺泊から野積の海岸



佐渡島 遠望

広大な越後平野が弥彦の向うに広がっていました。

残念ながら 佐渡島 そして 反対の内陸部 越後平野の向うにそびえる飯豊・奥只見・越後三山・上越の山々はうっすら霞んでいましたが、越後平野の水田に水が入り、太陽に照り輝いて 素晴らしい光景でした。

奥宮の社務所につめておられる神主さんによると、この時期 越後平野に水が入ると その水蒸気で周辺の山が霞んでしまうと聞きました。

また、衛星写真や地図で気になっていた弥彦山周辺 越後平野・海岸の地形。やっぱり、この山地をぶち抜いて流れる場所はなさそう。丘陵地ではない火山の地形・断層隆起の地形なのでしょうか 山は低いのですが、急峻な山が平野部からダイレクトに海岸に立ち上がり、そのまま海岸に落ち込んでいます。

南側の越後丘陵から北のこの弥彦山塊と海岸沿いに並ぶ山々が壁となって 海岸への流れ下る川を阻み、内陸部の現在の越後平野の中を流れ下る信濃川に合流しつつ、大河がのた打ち回りながら流れ下ったことが良くわかる。

本当に起伏の少ない広大な平野が内陸側に広がっているのが見えます。また、流れ下ってきた信濃川は唯一海岸へ出られそうな幅の狭い山地の切れ目がある分水町で人工的に海岸部に向かって 掘りぬかれた直角に放水路で、寺泊海岸に流されているのが、頂上からくっきりと見えました。

寺泊の南の海岸沿いを走る越後丘陵に見えるあの「魚の骨状に幾筋にも平行に広がる枝谷」どうなっているのか???? 興味津々でしたが、これも本当でした。



柏崎の北 越後・東頸城丘陵の不思議な地形 右端は信濃川

丘陵地の真ん中背骨の平地が南北に走り、その両側に幾重にも重なり合って、丘陵地が並んでいるのが見えました。

泥岩を主とする山に刻まれた枝谷がこの正体。

海の中で長く眠っていたホッサマグナの大地溝帯が地殻変動で隆起し、褶曲・断層の繰り返しの中で出来た南西から北東に伸びる幅の狭い泥岩質の山地に雨水の流れが刻んだすさまじい模様でした。



弥彦山は日本三彦山と呼ばれるほかの二つの英彦山・雪彦山が、修験の山として陰しい山であるのとはちょっと違う感じの山でしたが、広大な越後平野の真ん中に立つ独立峰。しかもその周囲の越後平野は氾濫を繰り返す大河と泥の湿地だったという。そして、低山ながらそこで、深山と同じように鉱物資源が発見され、この山を目指して 海も渡った鍛冶集団がいた。

天変地異の中 どこに居ても常に変わらず堂々と立つ姿に崇敬を抱いたと考えられ、その念は日本三彦山のほかの山とも変わらない。

また 海を渡ってきたものにとっては、海岸にぽっかり浮かぶ様はすごい山と写ったことでしょう。

帰りは もう一度 山上公園に戻って そこから ロープウェイで、越後平野を見ながら山を降りる。

越後三山を含め、数々の名山 が越後平野周囲を飾っていますが、この頂上からの風景 この広大な越後平野の中央にどっしりと浮く様は、その周辺の地形のすさまじさも含め、越後平野の盟主にふさわしい。

「弥彦神」が居ます弥彦山はやっぱり存在感のある 山 日本三彦山に数えられる所以と納得です。

古代 鉄の国「越」 その盟主 弥彦山 今回の walk で はっきり鉄の道の痕跡を見つけられませんでした。が、数々の製鉄関連伝承のあることを知りました。また、越後平野のすぐ隣 柏崎では古代の 日本海側では かつて見られぬ大規模な古代の製鉄コンビナートが発掘されました。 今後 さらに 越後の鉄が日本文化に与えた影響 越後の和鉄の道が見えてくるものとイメージを膨らませています。

佐渡 そして 内陸側越後平野の向うにくっきりと浮く山並みはみられませんでした。が、念願の弥彦に上って、満足感で一杯。 ロープウェイからの広大な越後平野を眺めながら降りてきました。

フォッサマグナ帯の山と言うと日本アルプス の山々を考えますが、今回調べていて、この越後平野がすっぽりそのままフォッサマグナ帯に収まっていること、弥彦山がその中の活動で生まれた山であること をはじめて知りました。

中越地震もそんな活動のひとつだったのでしょう。 厳しい試練。

でも、自然変化の厳しい越後平野の厳しさを長年に わたり克服してきた新潟。

中越地震に立ち向ってきた話を語られるのをあちこちで聞くことが出来、気持ち的にほっとしています。

早く立ち直ってほしいと願っています。

2007. 5. 16. 昼 弥彦のロープウェイから 越後平野を眺めながら

Mutsu Nakanishi



2. 越後平野の不思議な地形 謎の越後平野 (資料)

■ 不思議な地形 謎の越後平野



越後 広大な平野が新潟を中心に海岸に沿って広がる日本有数の米どころ

そして そんな平野部の中 島のように浮かぶ弥彦山

これが関西にいるわたしたちの新潟のイメージ

でも 昔から 頭に残る腑に落ちないことがある。

苦勞して糸魚川・直江津と海岸沿いを走る汽車が越後平野にかかる柏崎で突如 海岸を離れ、内陸を海岸に平行に走り、そんなに離れていない海岸にも、もう一本線路が走る。しかもどちらも 新潟で合流して、新潟は官陽線が通なれ、本線は北へすり抜けてゆく。トワイライトエクスプレスなど日本海側を走り抜ける特急は新潟に入らないという。これらの日本の平行に走る線路の間を上越新幹線が新潟へ突き進む。途中 燕・三条なる駅が2本の鉄路を結ぶようにある。東西に伸びる越後平野の中 交通網は本当に不思議なのである。

また、新潟は北の会津から流れ下る阿賀野川そして 信濃川から流れ下る信濃川の河口と思っていましたが、信濃川は新潟では狭くなってしまっ、むしろ 寺泊海岸へ付けられた放水路へ抜ける。これもイメージが違う。

そして、衛星写真で見つけた弥彦山の南の海岸に沿って伸びる低い丘陵地・越後丘陵のまるで魚の体の骨のような地形。もう 不思議でいっぱいである。これは 何なのか…… 僕が知らないだけなのか……

弥彦山に登れば 何か解るだろう。また 弥彦山は日本3彦山の一つで、古くからの信仰の山で、「彦山」と言うが金属精錬とリわけ銅と関係が密にあるといわれているが、この平野部に鉄の痕跡はあるのだろうか??? これも 知りたい。



上 越後平野稲穂の海に浮かぶ弥彦山
中 寺泊周辺
南から流れてきた信濃川は90度方向を変えて、放水路へ
下 寺泊海岸 海岸に伸びる丘陵地の特異な姿

日本の大地溝帯「ホッサマグナ」上に堆積した泥岩質褶曲地を刻む暴れ川と海岸の波が広大な低地・越後平野を作った

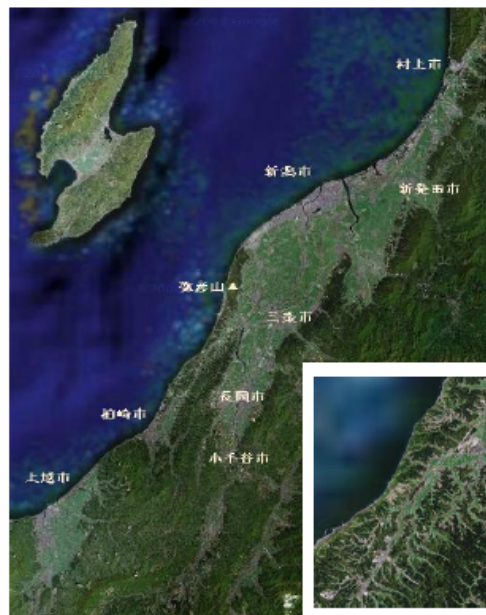
不思議な地形の新潟・越後平野 そんな越後平野の海岸にぽつり 弥彦山がある

1. 広大な越後平野が広がる新潟 その新潟への鉄道はなぜか 内陸の新津を経由した官陽線 なぜだろう
 - 親不知の難所を克服して海岸を走ってきた鉄路がなぜか 越後平野に入る柏崎で90度曲がって内陸へ
 - 鉄道は広大な越後平野の中を避け、内陸の山脈を走りぬける
 - 海岸に扇状に広がるのでなく 海岸に斜めに並ぶ3つの丘陵地に挟まれた内陸深くに広がった特異な平野
2. 柏崎北 海岸沿い丘陵には 兎のあばら骨状の不思議な形で無数の谷が刻まれている こんな不思議な地形 見たことなし



新潟の地形

南西から北東へ 平行に並ぶ丘陵・山地の間を
のたうって流れ下る信濃川・阿賀野川が一つになって越後平野を作っている



柏崎の北 越後・東頸城丘陵の不思議な地形 右端は信濃川

■ 新潟の地形の成り立ち

越後平野はそっくりそのまま日本の大地溝帯「フォッサマグナ」の上にある

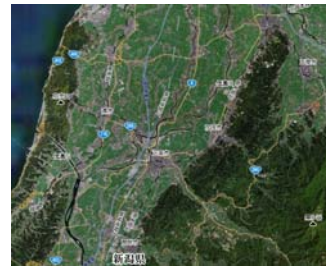
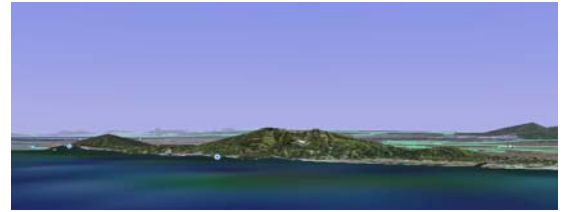
これらの話が示すとおり、現在の越後平野はすっぽり、フォッサマグナ・日本の大地溝帯の中に収まっており、このフォッサマグナ帯が海底にあった時代に、泥や火山堆積物が積みかさねられ、それらが その後の造山活動で隆起・褶曲・断層作用で地溝帯の中に複雑な幾筋もの褶曲山脈が出来た。そして、それらの間を流れ下る川と海岸の潮流によるラングーン形成により、内陸部では扇状地・氾濫原が山の間を埋め、海岸近くで広大な低湿地と潟が形成された。

特に越後平野の海岸部に沿って越後丘陵と弥彦山地が、流れ下る幾筋もの川が海岸に流れ出るのを阻んだため、内陸部に広がる広大な氾濫原・低湿地を形成した。

また これら泥岩質の山地・丘陵地には数々の断層が複雑に走り、雨によりその泥岩層がけづられ、複雑な枝谷を形成しつつ、泥を低湿地まで運んでいった。

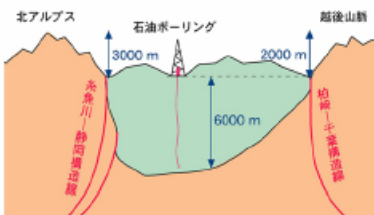
したがって、越後平野の中流から下流部にかけての中央部は常に変化する泥質層であり、中央部はのたうつ信濃川が流れ下り、交通網はおのづから中央部をさけ、山裾を通ることになる。

そして、特に信濃川河口の新潟周辺はその名が示すとおり、海岸を砂州で閉じられた低湿地であり、交通路も制限された。また 越後丘陵の走る海岸部の山裾も数々の枝谷が形成されており、結局 越後平野の内陸側の縁が交通路の主力となり、それが、越後平野現在の鉄道網として 残っていると思われる。



新潟の地形の不思議をとく鍵

フォッサマグナ系とそこを流れる大河 信濃川と阿賀野川



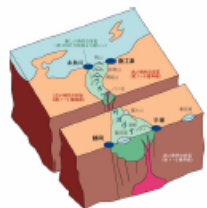
新潟平野の地形とフォッサ・マグナ

新潟県は、日本の弧状列島形成に重要な意味を持つフォッサマグナの大地溝帯上にあり、日本有数の複雑な地質構造区に属する。

県域の多くがフォッサマグナに積層した比較的新しい年代の地層上にあり、主に山地、丘陵地、低地からなる。

山地は、山形・福島・群馬・長野・富山各県界にまたがる朝日山地、飯豊（いいで）山地、越後山脈および飛騨山脈の山々より形成。越後山脈はフォッサマグナ形成の隆起地形として険しい山容を呈している。丘陵地は、海岸沿い弥彦山に続く越後丘陵そして信濃川中流域に魚沼丘陵・東頭城（ひがしくびき）丘陵などが分布する。

低地は、信濃川・阿賀野川・関川・姫川等の河川流域および河口部に発達しており、中でも信濃川・阿賀野川流域に広がる越後平野は日本最大の面積を有する平野であると同時に軟弱地盤地帯を形成する。また、越後平野沿岸部には砂州が発達し、山地山麓部や丘陵地では小河川や降雨浸食のために数多くの谷が分布している。新潟県は地すべり多発地帯としての側面も持っているが、これは主に山麓地や丘陵地が泥岩質の層状構造や褶曲を成し、その上に風化土や崩積土などの二次的な堆積構造が被覆しているなどの複合的な要因によると考えられている。

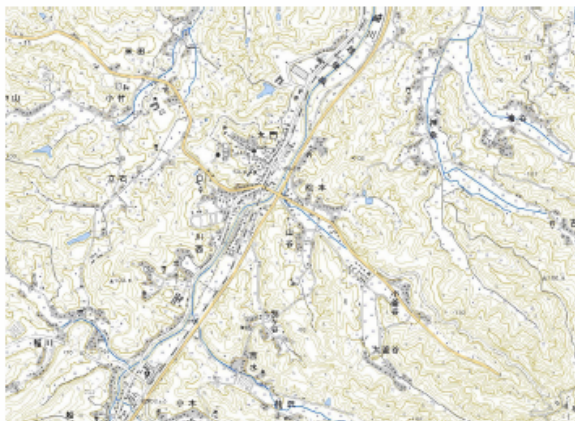
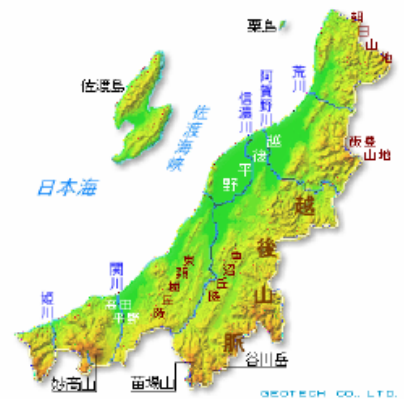


日本の大地溝帯「ホッサマグナ」帯の上にある新潟。

泥岩質の層構造の地層が褶曲・断層でできた丘陵地・山地が南西から北東へ平行して立ち並び、それらを刻んで無数の枝谷を形成しながら、大河が大量の土砂を飲み込んで、地後退の中を出口を求めて海岸部へ流れ下り、海岸に到達した土砂は波に押し戻され、堆積し海岸に砂州・潟を作る。まさに「新潟市」周辺はそんな大湿地帯。越後平野は海岸に広がるというより、丘陵地・山岳部の泥岩層から吐き出された大量の土砂が地溝帯を埋め尽くしてきた平野である。湿地の改良が新潟の歴史であつたろう。

越後・頸城・魚沼の3丘陵に刻み付けられた魚のあばら骨のような幾筋もの谷がそんな歴史を示している。

また、暴れ川 信濃川も寺泊への放水路の完成し、それによって 湿地「新潟」の土地改良もすすんだのだろう。現在は日本の大穀倉地帯である越後平野の水田も かつては腰まで使つての田植えといわれ、暴れ川信濃川とあいまって、平野の中央部には鉄道を通せず、内陸部の山地・丘陵地の端を通らざるを得ず、内陸部に迂回せざるを得なかったのだろう。魚のあばら骨のような枝谷がいくつも形成されている海岸沿いの越後丘陵の中も同じで、この中に引かれた越後鉄道線も信濃川を渡って新潟にまでつながったのはずっと後年といわれる。



いくつもの枝谷を越ながら狭い谷あいを通る越後線が走る越後丘陵



かつては大きな「潟」だった新潟市周辺 交通網

■ 大古からの日本列島の成り立ちと深い関係のある新潟の地形

越後平野の形成

越後平野は日本の大地溝帯 フォッサマグナの中に形成された平野で、ユーラシア大陸から切り裂かれ、日本列島が形成されてゆく過程で、形成された日本の大地溝帯 フォッサマグナの中に形成された平野で、その土台は白亜紀後期の花崗(かこう)岩類と新生代第三紀の火山岩類や堆積岩類からできています。

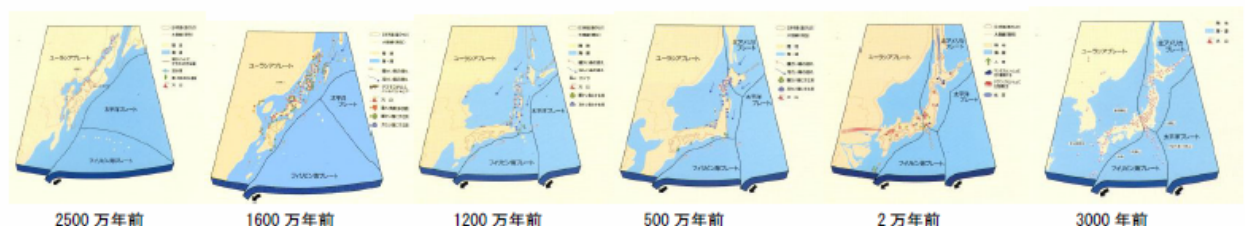
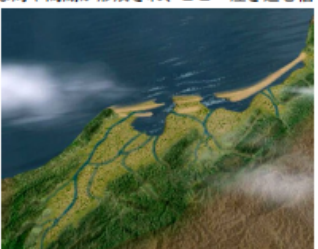
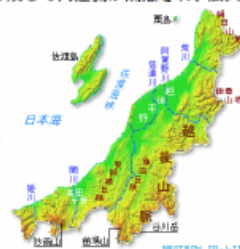
ユーラシアプレート 北米プレート 太平洋プレート フィリピンプレートのぶつかる地点に日本列島があり、数々の地殻変動・火山活動・造山活動と共に、幾度となく海底になったり、陸に成ったりを繰り返す、今から約 12000 万年前に今の日本列島の地質・構造骨格ができ、この枠組みの中 河川・潮流が大量の土砂を堆積させ、平野部を形成して行った。

特にフォッサマグナ帯には プレート相互の動き・圧力による褶曲作用によって 「新潟方向」と呼ばれる北北東-南南西～北東-南西への地質構造配列(断層・山地・丘陵)が立ち並び、その間を土砂堆積でうずめたかたちで、越後平野が形成されている。

特に 海岸線の弥彦山地が隆起して日本海をさげざつたため、山地北東縁から村上へ砂丘列が形成して内陸側が隔離され、広大な湾や潟湖が形成され、ここへ注ぎ込む信濃川・阿賀野川的作用とあいまって、広大な越後平野が形成されたていった。このため、阿賀野川・信濃川の河口である新潟市を中心とした地域は海岸部を砂州で仕切られた潟が連なる広大な低湿地である。

越後平野の南西端から北東に広がる長岡市周辺は西を海岸部の越後丘陵・弥彦山地 東を頸城・魚沼丘陵に挟まれた間を流れ下る信濃川の扇状地 そして その下流 燕・三条周辺は氾濫原でその下の河口へ三角州・湿地を形成している

また、越後平野の北東部には 北から順に、荒川・胎内川・加治川・阿賀野川が南東から北西方向に流れて日本海にそそぐが、海岸部と背後の山地が近くしかも海岸部砂丘で閉塞されるため、それぞれが扇状地や氾濫ゲンを形成しつつ 越後平野の北東部を形成している。



3. 弥彦山と鍛冶神伝承 (資料)

弥彦山周辺の 鍛冶神・金属精錬の伝承・痕跡

西蒲原郡弥彦村と長岡市との境 新潟県の海岸に面して、越後平野の稲穂の真っ只中にぽっかりと浮ぶ弥彦山。標高は638mの低山であるが、古くから「おやひこさま」と呼ばれる信仰の山で、日本三彦山の一つ。深田氏が「日本百名山」の後書きにて、名山には違いないが絶対的な標高が足りなかったと語った美しい山でもある。晴天なら日本海の向こうに佐渡も見える。

「彦山」と言うといずれもその国の「鍛冶神・開拓神」と関係する信仰の山で、古い銅鉱山が近くにあり、弥彦山と峰続きの多宝山の周辺には古い銅山跡が残っている。「銅のあるところでは鉄も出る」。この弥彦山・寺泊から南柏崎に続く海岸は「砂鉄の浜」また、確か大古い鉄の国「丹後」の大江山の酒呑童子は越後の弥彦山塊 国上山の生まれ。鉄の国「越」の弥彦山「鉄の痕跡もあるに違いない。」と。弥彦山への walk の予備知識として 弥彦山周辺の「鍛冶神・金属精錬の伝承・痕跡」を調べました。

■ 1. 弥彦神の片目伝承 Kiiichi Saito さんのホームページ 丹後の伝説【6】 弥彦神社より整理 http://www.geocities.jp/k_saito_site/bunken6.html

越後の一の宮である弥彦神社の祭神が片目であるという伝承は越後一帯に分布している。

地元の藤田治雄氏が雑誌『高志路(こしじ)』に精力的に発表している。

以下、藤田氏の報告によって、この伝承をみることにする。

伝承の内容は各地とも大差ないが、その一、二例を示す。

1. 西蒲原郡岩室村間瀬

「弥彦明神様は開村の神様である。神様が弥彦へ移られる時、鬼の道案内で山を登られたが、山中でウドで目を突かれたそうで、古来弥彦山にはウドが生えないといわれる」

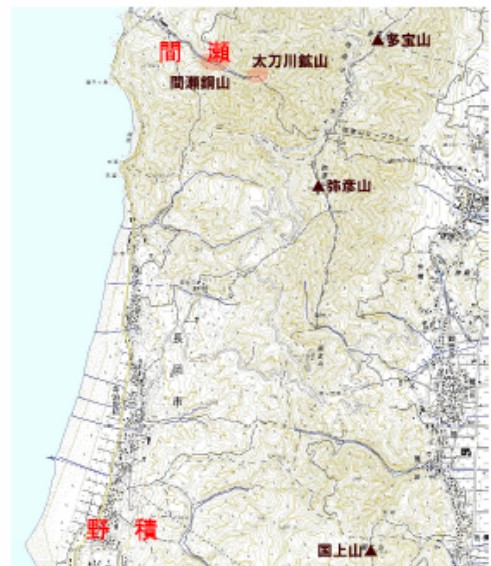
2. 三島郡寺泊町野積字内川

「弥彦の神様が妻のおヨネと十二人の子を野積(のづみ)浜に置いて身を隠そうと弥彦山へ登る時、足をすべらしてウドで目をつついた。それで弥彦山にウドが生えず、弥彦の神様は片目である」

この間瀬と野積とは弥彦山をはさんで弥彦神社の裏側にあたり、日本海に面している集落である。

藤田氏は、この野積と間瀬の境界線を中心とした一帯は弥彦信仰における鍛冶神の痕跡がもっとも濃厚にあらわれている地帯であるというが、それは弥彦神がウドで目を突いて片目神であるという伝承と一致する。

また、『地名辞書』はこの間瀬と野積には、元禄年間(1688~1704)に銅のつる(鉱脈のこと)を見立てて掘ったが途中でやめたという記録のあることを紹介している。



弥彦山塊 周辺マップ

■ 2. 弥彦神社

弥彦山の麓に弥彦神社があり、弥彦山全体がこの弥彦神社の神域である。そしてその山頂に奥の院があり、古くからの信仰の山である。

弥彦神社は、「万葉集」にも詠われている古社であるが、創建年代は不詳。祭神は天香山命。

越後国開拓の詔を受け、越後国の野積の浜(現長岡市)に上陸し、地元民に漁労

や製塩、稲作、養蚕などの産業を教えたといわれ、越後の国を造った神として弥彦山に祀られ、「伊夜比古神」と呼ばれて崇敬を受けている。また、弥彦神は女神との伝承もあり、『妻戸記』には、祭神は天香山命の妻となっている。天香山命を弥彦神としたのは後世のことともいわれているが、天香山命が銅の精錬に縁のある神なのでもってきたのであろう。

天香山命の「カグ」に共通する言葉は「鉱山」とする説がある。

日本神話 伊弉冉神が最後に火之加具土神を生み焼死する物語は金属精錬、銅の流れ出す様を表した神話とされ、「カグ」に共通する言葉が「鉱山」だという。

天香山命は天照皇大神の曾孫にあたり、饒速日(ニハハヒ)を父とし、尾張氏の始祖といわれ、神武天皇に神剣を献上して東征を助ける大功があり、のち神武天皇の命を奉じて越後に来て開拓を進め産業を興したとされる。



弥彦神社 2007.5.16.

■ 3. 間瀬銅山跡

弥彦山の北 峰続きの多宝山は銅が産出され名前のおとりの山。この弥彦・多宝山と続く山の西側山麓 海に面した旧岩室村間瀬地内より真川を溯ったところに間瀬銅山が広がっていた。銅が出ることは古くからよく知られていたが、元禄14年(1701)から採掘が始まったといわれる。最盛期は大正前半で、県内外の人々がどっと流入した。間瀬銅山の銅鉱石は良質で安定した産出で山麓に選鉱場、精錬場がつくられ、銅として燕市に運ばれ、銅の加工産業を興し、その後の金属加工産業につながり街が栄え発展し現在につながる

「日本鉱産誌」によれば、この地は第3紀中新世(寺泊層下部)の粗流玄武岩を貫く閃緑ヒン岩中の鉱脈で、黄銅鉱、黄鉄鉱、閃亜鉛鉱、方鉛鉱そして石英を産するとある。



弥彦山 2007.5.16. 燕・三条周辺 信濃川岸より
(左端 国上山 中央左 弥彦山頂 右端し 多宝山)

弥彦山の周辺には数々の「鍛冶神」伝承が残っており、古い銅山もあり、日本三彦山と関連づけられる「銅」精錬との深い痕跡が見られる。でも、周辺の海岸には砂鉄が堆積しているが、古代の製鉄との関係はいまひとつ良くわからない。

しかし、「弥彦の神」が片目であり、「海を渡って野積の 海岸に上陸し、越後を開拓した」との伝承は、農耕・治水に「鉄」の道具がきわめて重要だった古代 各地に伝わる「開拓神・製鉄神」伝承そのものである。

製鉄と関連付けられる大江山の酒吞童子の生まれが弥彦山 というのも「鉄」との関連をうかがわせる。

鉄の国「越」 その海岸沿いに立つ弥彦山で海を渡ってきた製鉄集団が鉄鍛冶をはじめたのではない か・・・

そして、古代 8世紀末から9世紀 越後平野に隣接する 海岸の柏崎の丘陵地で 古代の大製鉄コンビナート(柏崎軽井川南製鉄遺跡群)が作られてゆく礎となったのではない か……

そんなイメージを膨らませている。

「弥彦の神」伝承 (整理)

弥彦の神は遠く海より、弥彦の海岸 野積の浜に上陸して
漁労や製塩、稲作、養蚕などの産業を教えたと伝えられ、
越後の国を造った神として弥彦山に祀られ、
「伊夜比古神」と呼ばれて崇敬を受けている。
また、「弥彦の神」は片目との伝承が周辺に広くあり、
弥彦山から 銅などの鉱物資源が出ることから、
弥彦の神は 海を渡ってきた鍛冶集団の神(鍛冶神)とも考えられている。
また、大江山 酒吞童子の生まれが弥彦といわれ、
弥三郎伝説 弥三郎婆(鍛冶場の母)伝承など多くの鍛冶伝承がある

「弥彦神」を祭る弥彦神社の祭神は天香山命で
金属精錬・鍛冶と関係深い古代の物部氏・尾張氏の始祖祖につながる。
後年 銅など金属精錬と関係深いことから祭神とされたといわれる。

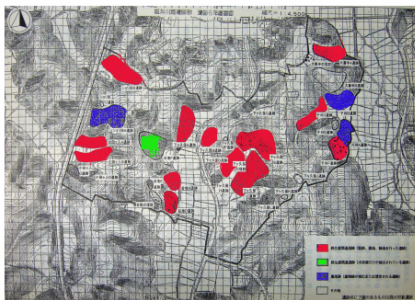
参考 谷川健三「鍛冶場の母」ほかより
藤田治雄 雑誌『高志路』に発表報告より
(Kiichi Saito さんのホームページ 丹後の伝説【6】 弥彦神社より)



古代「越」の大製鉄コンビナート 柏崎市 軽井川南製鉄遺跡群 2007.5.15.



柏崎市 軽井川南製鉄遺跡群全景 左奥 米山 中央 下ヶ久保製鉄遺跡群 右千刈 C遺跡 右端奥 大善寺遺跡



古代の製鉄遺跡 軽井川南遺跡群 千刈 C 製鉄遺跡 西地区 8世紀末・東地区 9世紀

千刈 C 西地区 箱型炉 1基 半地下式木炭炉 3基
千刈 C 東地区 半地下式製鉄炉 2基 地下式木炭炉 8基



千刈 C 西地区 箱型炉

千刈 C 東地区 半地下式製鉄炉

千刈 C 東地区 半地下式製鉄炉

10. 日本三彦山の一つ 越後 弥彦山 Walk 2007.5.16.

古代の鉄の国「越」 弥彦山に鍛冶神の痕跡を探して

【完】

1. 日本三彦山の一つ 越後 弥彦山 Walk
2. 越後平野の不思議な地形 謎の越後平野 (資料)
3. 弥彦山と鍛冶神伝承 (資料)